映画と講演
「映画をとおして人権を考える」

亀井文夫監督作品

人間みな兄弟

―部落差別の記録―

同和対策審議会答申から５０年を考える！

第3回人権問題講演会

映　画「人間みな兄弟」1960年ドキュメンタリー作品／60分
講　演「部落問題への眼差し」
静岡大学教育学部
教授　黒　川　みどり　さん

10月3日(土)13:30～16:30
コムズ 5階 大会議室

Do

主催:NPO法人「Do」
(松山市委託事業)

後援:松山市教育委員会・松山市公民館連絡協議会・松山市人権教育推進協議会
愛媛新聞・NHK松山放送局・南海放送・テレビ愛媛・FM愛媛・あいテレビ
愛媛朝日テレビ・愛媛CATV・リビングまつやま

映　画：「人間みな兄弟　ー部落差別の記録ー」 1960年ドキュメンタリー作品/60分

=解　説=

わが国のドキュメンタリー映画の第一人者である**亀井文夫監督**によって1960(昭和35)年に製作された映画で、結婚や就職などにおける部落差別の実態に迫って関西近隣を中心に50ヶ所を超える地域で撮影が行われました。ハンダの屑が含まれるゴミ土や灰を集めて小川で洗い出す少年、鹿ノ子絞りを紡ぐ女性、草履づくり、食肉関連事業や皮革生産など、様々な形態の部落の姿が生々しく描かれており、映像資料としても大変貴重なものといえます。

この映画が製作された1960(昭和35)年には同和対策審議会法が公布され、5年後の1965(昭和40)年8月には同和対策審議会の答申が出されました。映画の上映と講師の講演を通じて、映画が制作された背景や作品の内容について検証しつつ、被差別部落が映像によって記録される意味を考えながら、日本固有の人権問題である同和問題（部落問題）の社会的背景と差別・偏見の根源にあるものを探ります。

=監督：亀井文夫=

1908(明治41)年福島県に生まれる。ソビエト美術を学ぶため1929(昭和4)年にソビエトへ渡る。渡航中に観たソビエト映画に衝撃を受け、レニングラード映画技術学校の聴講生となる。その後、肺結核を患い帰国。サナトリウムで療養生活を送った後、写真化学研究所(P.C.L)に入社。『戦ふ兵隊』(1939)『小林一茶』(1941)などの作品を監督した。『戦ふ兵隊』は軍部が期待するような戦意昂揚映画ではなかったため、上映不許可となり、のちに治安維持法で検挙され投獄。

戦後、天皇の戦争責任を追及した『日本の悲劇』(1946)を世におくり出し、『母なれば女なれば』(1952)『女ひとり大地を行く』(1953)などの劇映画を手がけたのち、日本ドキュメンタリーフィルム社を設立。『生きていてよかった』(1956)『流血の記録・砂川』(1956)『世界は恐怖する一死の灰の恐怖』(1957)『人間みな兄弟一部落差別の記録』(1960)など、多くのドキュメンタリー作品をつくり、その後、企業PR映画の製作に携わるようになった。

『みんな生きなければならない一ヒト・トリ・ムシ　農事民俗館』(1984)でドキュメンタリーに復帰し、『生物みなトモダチ<教育編>ートリ・ムシ・サカナの子守歌』(1987)を完成させたのち病に倒れ、1987(昭和62)年、敗血症のため亡くなる。享年78歳。

講　演：亀井文夫と「人間みな兄弟」ー部落問題への眼差しー
静岡大学教育学部教授　黒　川　み　ど　り　さん

=略　歴=

1981(昭和56)年早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業。1990(平成2年)同大学院博士課程を経て、2000(平成12)年「異化と同化の間—近代社会における被差別部落認識」で早大文学博士。同年、静岡大学教育学部助教授、2001(平成13)年同大学教授。2000(平成12)年から2001(平成13)年までミネソタ大学歴史学科客員研究員。

部落問題を中心に、近代日本における差別の問題について独自の視点から研究を重ねている。著書に「描かれた被差別部落—映画の中の自画像と他者像」（岩波書店）「近代部落史—明治から現代まで」（平凡社新書）の他、著作多数。

『部落差別は、社会の構成員がつくり出すものであり、“他者„に向ける広義の意味での“眼差し„にも深く由来する問題である。当然にして被差別当事者も、しばしば差別的と自らに映るそのような眼差しに対抗して、自ら部落民像を立ち上げてようとしてきた。したがって部落差別は、多分にそのような他者像と自画像の衝突やズレと密接に関わる問題でもある。映画はそれに接近する上で有効な手段の一つと考えることができよう』

黒川みどり著「描かれた被差別部落」(岩波書店)より

黒川みどりさん

NPO法人「Do」(同和問題を考える市民の会)：〒791-8036 松山市高岡町171-8(高松)　理事長：那　須　　洋　事務局：高　松　さよ子（携帯：080-6394-6924）